

[39] ノイマイヤー振付『オデュッセイア』『椿姫』

～愛の喜びと絶望を描く2作 パステルと油絵～

1997年3月14日 東京新聞 夕刊

ハンブルク・バレエが今回の来日で上演した『オデュッセイア』と『椿姫』は、まったく印象の異なる作品だった。演出振付はどちらも芸術監督のジョン・ノイマイヤーである。

『オデュッセイア』はホメロスの壮大な叙事詩が原作だ。トロイ戦争で名高い木馬作戦を思いついた智将オデュッセウスが、戦い終えて妻の待つ故国へ帰るまでに、十年ものあいだ海上をさまよい、幾多の誘惑や試練を経なければならなかったという物語だが、バレエはそれに現代のベトナム戦争や湾岸戦争を重ね合わせて、象徴的でモダンな舞台である。

客席がまだ明るく観客が席を探しているのに、舞台ですでに人物たちが動いている。舞台奥が豪華客船の甲板のようになっていて、白い社交服の船客たちがグラスを片手にテレビに見入る。画面に映し出される戦争、そして海原。それが古代につながっていく。

主人公オデュッセイアを演じるのはイヴァン・リスカである。バレエ・ダンサーには珍しく豪気で沈着。彼ほどオデュッセイアにふさわしいダンサーはまず見当たらない。

装置、衣装ともにさらりと軽快で、ジーパンをはいた仙女カリユプソーやレインボーカラーのドレスの女神キルケーが主人公に妖しく迫る。自然体を大

[39] ノイマイヤー振付『オデュッセイア』『椿姫』

～愛の喜びと絶望を描く2作 パステルと油絵～

1997年3月14日 東京新聞 夕刊

胆に展開した動きは空間を無辺の広がりへと開くように、それがいつそこの空しさを掻き立てた。

そして海がそれらすべてを呑みこんでしまう。この海がすばらしい。群青の長い大きな裳裾を引くダンサーが、体を前に傾けてゆつくりと現れると、それが波頭に見え、裾をひるがえすと高波になり、はては大海原となって舞台一面を青一色に染め上げる。

だが最も見応えがあるのは、オデュッセイアと妻ペネロペイア（ポリカルポヴァ）のパ・ド・ドウである。二つの肢体が際限もなく絡み合い、一切が安らぎのなかに溶けていく。結局この物語は、男が女のもとへ帰り着くための果てしない道程でしかない。その最も単純なことが、昔も今も困難なのだ。こういう主題になると、ノイマイヤーがあやつる舞踊言語はじつにニュアンスに富んでいる。

* * *

『椿姫』も愛の希望と絶望を描いたバレエだが、『オデュッセイア』をパステルの絵巻物だとすれば、こちらは質量感のある油絵。しかも時間という奥行きを持った構築物である。原作はオペラと同じデュマ・フィスだが、音楽はショパンのピアノ曲からラルゴやワルツを抜き出してつないでいく。軽やかで切なく、透明である。

青年アルマンが高級娼婦マルグリットに恋心を抱

[39] ノイマイヤー振付『オデュッセイア』『椿姫』

～愛の喜びと絶望を描く2作 パステルと油絵～

1997年3月14日 東京新聞 夕刊

く。純真で性急な情熱に、年上の女が戸惑いながらも引き込まれていく心模様、言葉よりもっと鮮明に伝わってくる。こうした語りのテクニクのゆえに、ノイマイヤーは最先端の振付家たちから古いという評価を受けることがあるのだが、しかし心を描く力量は、いつの時代でも芸術における最大のメリットではないだろうか。

贅沢を捨てて二人きりの生活が実現した時、恋人たちの喜びを表現するパ・ド・ドゥは、私が今までに見たなかで最も甘美なものだ。この作品はほぼ二十年前にシュツットガルト・バレエのために振り付けられて以来、再演の度に表現が磨かれてきたのであろうが、それにしても何とも美しく精緻な振り付けである。

アルマンの父（リスカ）の頼みをいれて別れを決心したマルクリットは、生ける屍さながらの虚ろなさま。ジジ・ハイアットが演じるマルクリットは、全編をつうじて十代の初々しさから中年女の悲哀まで、女の一生の光と影をあますところなく描いてみせる。

バレエ『椿姫』の卓抜なアイデアは、劇中劇ならぬバレエ中バレエとして『マノン・レスコー』を挿入したことである。これはノイマイヤー得意の手法で、前回来日の『幻想く「白鳥の湖」のように』で

[39] ノイマイヤー振付『オデュッセイア』『椿姫』

～愛の喜びと絶望を描く2作 パステルと油絵～

1997年3月14日 東京新聞 夕刊

もなかに古典バレエが嵌め込まれていたが、『椿姫』には『マノン・レスコー』を観劇するシーンがある。ヒロインはこの放埒な魔性の女の物語に衝撃を受け、みずからの背徳的な生活に嫌悪を抱く。つと立ち上がり、舞台の中に入って行って、マノンの代わりに踊り出すマルグリット。私たちが芸術作品に自己を重ね合わせるときの心理がそのまま具体化されていて、なるほどと思う。

興味深いのは、この劇中のバレエシーンがたいそう誇張されたクラシックなスタイルで踊られていることだ。原作の小説が十八世紀の『マノン・レスコー』と十九世紀の『椿姫』だという時代差もさることながら、同じクラシック・バレエのなかでのスタイルの変化が歴然と見えて、年代的な表現の移り変わりといったことも考えずにはいられない。ノイマイヤーはここでさりげなく、バレエ史のなかでの自分の位置付け、ないしは自己主張をしているのにかがいない。

三十代半ばで振り付けたものだが、あるいは『椿姫』はノイマイヤーの代表作になるかもしれない。幕が下りた後、観客は立って上がって拍手を送り、長く鳴り止まなかった。